

# 言葉のむずかしさ

機関紙「才能教育」第59号（一九五四年）より

鈴木鎮一

子供のヴァイオリンを弾く姿勢がわるくて、どうしてもヴァイオリンが下がって困る、という一つの欠点が存在するところには、いつもきまつて「ヴァイオリンを上げて」

といううるさい世話やきが続けられてゆく。

ところがこのような世話やき言葉の効果が案外少ない場合が多いのである。上げたと思うとすぐに下がってゆく。そこには、ただ一つのこと、即ち<sup>すなわ</sup>

「姿勢を正しくして終りまで弾こう」という心が、まだつくられていないためではないだろうか。

私は試みにどうしてもヴァイオリンが下がる子供たちだけを並べて、その子供たちが楽々と弾ける曲、即ちその日には、バッハのメヌエット第三番で試してみたのであるが「バッハのメヌエットをヴァイオリンを下げないで、終りまでよい姿勢のまま弾ける人が、この中に何人い

私は常に「自分の言葉の貧しき」について情けなく感じている。

自分の考えを他人に通じさせるに必要な、適当な言葉を知らない場合が実に多いことを思う。自分の言葉の貧しさのために、自分の思うことを他人に語る時、全く見当違いのうけとり方を他人の中につくってしまうことを、私は度々経験している。

実生活においては、そのようなことが実に多いのではないか。このことについて私は今まで「言葉というものは、不自由なものだ。自分の考えや自分の感じを、そのままに誤りなく他人に伝えることが、なかなか出来ないから」というように考えていたのである。

ところが、今になって思うに、それは私の心の不足さであると共に、それは私の言葉の貧しさから来るものである、ということを感じるようになって来たのである。

説明不十分であると同時に、相手の心、相手のうけとり方というものについては、全く無関心に、ただ自分の思うことばかりを並べている自分に気がついたのである。

「相手の心を赴かせる」という、相手の心をつくる手続

るだろうか」

と言ってから、その七、八人の子供たちに弾いてもらったところが、何と全員が正しい姿勢で弾き終り、一人もヴァイオリンの下がる子供はなかったのである。

「これはすてきだ。一人もヴァイオリンの下がる人はなかった」

と私は早速ほめてから

「これからは一つの曲が終るまでで宜しいから、その姿勢で弾いて下さい。曲が終ったら、ヴァイオリンを下げて宜しい。それが宿題です」

と言って笑ったことであつた。やろうと思えば出来るのだ。要するに「心を赴かせること」が矯正する場合、一番中心として考えられなければならないのだということをお忘れられるのである。

きが忘れられている場合が多いのであろう。

言葉というものは不自由なものではない。自分の考えは、言語というものを通して生れて来ている筈であるし、またその中に、たとえ言語以上の感覚・直感から生れたものがあるにしても、そこにはその直感が生れるまでの心理的環境と歴史が自分の中にはあつた筈である。

自分の考え、自分の感じを、相手次第によつてどのように伝えるべきか、一人一人うけとり方が違うかも知れない他人に、ただ単に自分の思うままを語っている拙さについて今私は反省の最中である。

人を見て法を説け、という言葉は今更のように思わせるのである。

言葉は選ぶべきであると思う。言葉はその人の感情も、その人の能力も、その人の心も、その人の人間性のすべての価値を示してゆくもので、丁度バッハの音楽がバッハを、ベートーヴェンの音楽がベートーヴェンを、そこには少しも飾ることも、偽ることも出来ずにありのままにその人間が示されているのと全く同じことであらう。

言葉は各個人の創作だということも言えよう。